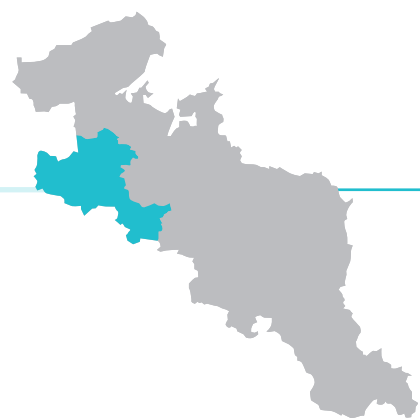


京都 Re-Search

京都:Re-Search 2017 報告書



京都:Re-Search 2017 in 福知山



8月21日から14日間、京都市内外で活動するアーティストが福知山市内に滞在し、各自が設定したテーマに沿って、福知山市の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想を作成して、次年度にそのプランの実現を目指します。

また、その記録をデータ化し、アートの視点による新しいドキュメントを作成します。

国際的に活躍するアーティストやキュレーターたちから、リサーチの手法やアートプロジェクトの作り方を学ぶワークショップやフィールドワーク、参加者の調査へのアドバイスを受けました。

京都市内では、交流人口の拡大、地域の活性化へ繋げるさまざまな取組を行っています。

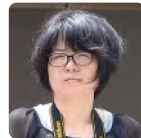
その一つとして、アーティストが一定期間滞在し、地域で制作を行うアーティスト・イン・レジデンス事業「京都・Re-Search」を実施し、地域が本来持ち得ているポテンシャルやその魅力をアートの視点から引き出すことを試んでいます。

2017年度は8月から9月にかけて、福知山市内で「京都・Re-Search 2017 in 福知山」、京田辺市内で「京都・Re-Search 2017 in 京田辺」を実施しました。そして10月から11月にかけては、舞鶴市内で「京都・Re-Search 2016 in 舞鶴」のリサーチをもとに、地域の新しいアートドキュメント（＝記録）を作成する「大京都2017 in 舞鶴」を開催しました。また12月には京都文化博物館別館にて、「京都・Re-Search × 福島・はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトフォーラム」を開催しました。「京都・Re-Search」と東日本大震災後、福島県立博物館が中心となって行っているアートプロジェクト「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」の共同開催により、それぞれの活動を通じたアートが社会（地域）に与える可能性について議論を深めました。



「# 元伊勢」

訪れた元伊勢神社で過去の賑わいを想像し、今は国道にあるカフェに「賑わい」や「幸福感」が移行していると感じた。展示場所ではカフェ形式で「現代版お伊勢参り」を試みた。



こまつ・かなこ

1982年青森県生まれ、福島県在住。2006年武蔵野美術大学卒業後、2015年から制作活動を開始。日常生活での違和感、気づきを元に、今を映し出す作品を目指し制作している。

小松可奈子

「福知山で得た生の情報や体験を元に作品を制作して、『福知山コレクション』としてまとめたり、『アフター福知山』として3年後にまたカフェを調査したいです。」



「タマムシの衣装を身にまとい、私は街へ出た」

「人間も自然の一部である」という感覚が福知山の人々の心に残っていると感じ、タマムシの衣装を着て変装することで、多くの人たちと出会い、受け入れてもらった。



いけなが・りの

1992年大阪府生まれ、在住。同志社大学文学部美学芸術学科卒業後、2012年頃からペインターとして活動開始。自然現象の中にある不思議に感動する気持ちを原点にしている。

池永梨乃

「地域の鬼伝説のイメージと融合してタマムシの姿を捉えられたり、私が思っても見なかった受け入れ方がされました。そこで地域独自の部分が現れ面白かったです。」

「この滞在が、レジデンスアーティストと土地の人という役割を通して相手と出会い、故にその背景にある地域と歴史に出会う、という体験であつたらいいと思います。」

夏池風牙



なついけ・かずゆ

1984年静岡県生まれ、2010年京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻修了。人の想像できる範囲とその外側に興味を持ち、写真等を使いながら、インスタレーションを発表している。

「夢の山々をめぐる」

「鬼」についてリサーチを行った。その内容だけでなく、市内を移動したり、地域の人たちと話をする機会が多く、違う文化や価値観を知ることができた。

「銭湯を紹介してくれた方やリサーチ中に出会った方が滞在中も度々気にかけてくれ、町の人との関わり合いの中で物を作る面白さやコミュニケーションの大切さを感じました。」

大平由香理



おおひら・ゆかり

1988年岐阜県生まれ、大分県在住。東北芸術工科大学大学院日本画研究領域修了。大平自身が出会ってきた風景や身体感覚のようなリアリティがあるものを手挂かりに制作を行う。

「福知山民族文化研究所 構想」

今回は市内に残る2軒の銭湯のリサーチに注力した。自分だけの作品ではなく、町の人との関わり合いの中で物を作る面白さや難しさを感じた。



京都:Re-Search 2017 in 福知山

参加アーティスト

池永 梨乃／大平 由香理／小松 可奈子／夏池 風牙／ヒサモト タカト／平井 槩（公募による6名）

開催日時 2017年8月21日（月）～9月3日（日）

場 所 滞在場所：昭和東集会所

ワークショップ等会場：まちのぼモジカ（福知山市中ノ28番地3）、
福知山市治水記念館（福知山市下柳39）、佐々木ビル（福知山市菱屋8）

プログラム

- | | |
|-------------------|---|
| 8月21日（月） | 京都府庁にて、藤浩志さん、島袋道浩さんからのオリエンテーションを実施。
場所を福知山に移し、ガイダンスとし、藤さんの「アーティストにとってリサーチとは」の講演を開催。 |
| 8月22日（火） | 藤浩志さんと福知山市内をフィールドワーク。
その後、各参加者によるプレゼンテーションを実施し、藤さんからアドバイスをもらう。
また、小田井真美さんとワークショップ「アーティスト・イン・レジデンスの活用と可能性」を実施。 |
| 8月23日（水）～8月25日（金） | 各自の計画により福知山市内を調査し、アートプロジェクトや作品プランの構想を策定。 |
| 8月26日（土） | 中間報告会を実施し藤浩志さんからアドバイスをもらう。
その後、鷺田めるろさんとワークショップ「地域とアートプロジェクト」を実施。 |
| 8月27日（日）～8月31日（木） | 各自の計画により福知山市内を調査し、アートプロジェクトや作品プランの構想を策定。 |
| 9月1日（金） | 参加者の作品プランやプロジェクトのプレゼンテーションによる講評会及び活動報告展を開催。 |
| 9月2日（土）～9月3日（日） | 参加者の活動報告展を実施。一般開放し多くの鑑賞者が訪れた。 |

講師プロフィール



小田井 真美
AIRディレクター／文化芸術事業設計

1966年広島市生まれ。2001年から02年までとから国際現代アート展テマータル事務局、03年よりNPO法人S-AIRに所属し、アーティスト・イン・レジデンス（=AIR）の運営、アートによる地域活性化事業、アーティスト・イン・スクールの企画、Sapporo2 Project（札幌の雪と除雪を考えるアートプロジェクト）のプロデュース。TransArtist（オランダ）で文化政策とAIRネットワーク・キングについて研究を行い、アークスプロジェクト（茨城）ディレクター、コマンドNと共にアーティストの移動のためのポータルサイトMOVE ARTS JAPANに携わる。札幌国際芸術祭（SIAF）2014でチーフプロジェクトマネージャーを務め、現在は札幌市のAIR施設さっぽろ天神山アートスタジオAIRディレクター、文化芸術事業とその背景に係る調査研究・事業設計が生き甲斐。



藤 浩志
美術家／秋田公立美術大学教授

1960年鹿児島県生まれ。奄美大島出身の両親の影響で大島軸周辺で遊ぶ。京都市立芸術大学在学中演劇に没頭した後、地域をフィールドとしたプロジェクト型の表現を模索。同大学院修了後バプアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初的表現と文化人類学に出会う。バブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用した美術表現を志向し対話とデモンストレーションを実践。取り壊された家の柱素材の「101匹のヤセ犬の散歩」。一ヶ月分の絵料からの「お米のカエル物語」。家庭廃材を利用した「Vinyl PlasticsConnection」「Kaekko」「Polyplanet Company」。架空のキーパーソンをつくる「藤島八十郎」等。NPO法人プラスアーツ副理事長。秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科・アーツ＆ルーツ専攻教授・副学長。



鷺田 めろろ
金沢21世紀美術館キュレーター

1973年京都府生まれ。担当した企画で特に地域に関わるものに、アトリエ・ワン、島袋道浩、坂野充学の個展、「金沢アートプラットフォーム2008」「3.11以後の建築」などがある。地域とアートプロジェクトに関する主な論考は「視点を生む、人をつなぐ」（『地域開発』521号、2008年）、「アートプロジェクトの政治学」（川口幸也編『展示の政治学』水声社、2009年）、「金沢アートプラットフォーム2008（金沢21世紀美術館）/CAAK」（熊倉純子監修『アートプロジェクト』水曜社、2014年）、「聴来現代美術祭における地域と伝統」（『金沢21世紀美術館研究紀要アール』6号、2016年）。第57回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際美術展日本館キュレーター。

ホームページ <http://kyoto-research.com/fukuchiyama>



「カラをやぶる」、「スナック芸術祭」

よそ者として気になった、いつかなくなるであろうスナックとガスの表示紙をリサーチした。いつも一人で制作しているので、新鮮な時間を過ごせた。



ひさもと・たかと
1993年京都府生まれ、現在愛知県立芸術大学大学院で視覚伝達デザインを専攻。これまでイメージと現実のズレを面白がることをテーマとし、特に「たぬき」をモチーフに制作を行う。

「今回の調査では、街の人々と関わる機会が多くありました。地域の地藏盆に参加し、だんだん踊れるようになって、自然と地域の人も声をかけてくれるようになりました。」

ヒサモト タカト

「養蚕は明治以後の日本の一側面を移す歴史と密接した産業です。日本史の大きな流れが福知山の生活の中に凝縮されているのを見つめるのもとても面白かったです。」

平井 槩



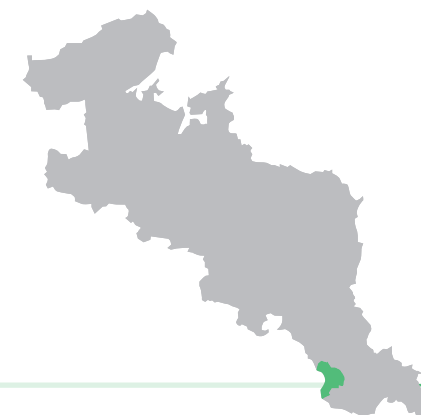
ひらい・まき
1988年山口県生まれ、山口県在住。京都精華大学素材表現学科テキスタイルコース卒業。個の感情をテーマに、樹脂やフェルト、粘土などの素材を組み合わせた立体作品を制作する。

「蚕を空に還す」、「蚕の∞」

府内でも福知山は養蚕の盛んな地域のひとつだった。その歴史、生活、信仰などをリサーチするため、元養蚕農家の方たちに話を聞いた。報告展では今の蚕供養の風景を提案した。



京都:Re-Search 2017 in 京田辺



京都:Re-Search 2017 in 京田辺 参加アーティストの取組

「京田辺を歩いていて、いくつかの土地の風景とリンクした。いろいろな土地で、京田辺の風景を思い起こすことが出来るのかもしれない。」

阿見 つばさ



あこ・つばさ

1991年北海道生まれ、兵庫県在住。京都精華大学卒業。社会に存在するscenario（起きる前、起き続けていたこと）・新話（つくっていくこと）の可視化、それらを含めた造形物を制作。

「郷土史と椿井文書」

山城ことばで「間」や「隙間」を意味する「あわさい」に興味を持ち、郷土史家の家を訪ねた。今後、偽史として研究される椿井文書についても、参考にしていきたい。



8月21日から14日間、京都府内外で活動するアーティストが京田辺市内に滞在し、各自が設定したテーマに沿って、京田辺市の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想を作成して、次年度にそのプランの実現を目指します。また、その記録をデータ化し、アートの視点による新しいドキュメントを作成します。国際的に活躍するアーティストやキュレーターたちから、リサーチの手法やアートプロジェクトの作り方を学ぶワークショップやフィールドワーク、参加者の調査へのアドバイスを受けました。

やさいじん
「野菜人」

棚倉孫神社の「ずいきみこし」を中心に、京田辺の食物と祭りをリサーチ。最初のうちは説明が難しかったが、終わった後も何度か神輿づくりに参加した。



「今年のずいき神輿、本番当日まで制作に参加し、来年のずいき神輿巡行に合わせて、どのように振る舞えば、祭に関わるみなさんが面白くなるいたずらができるのか考えています。」

前田 菜月



まえだ・なつき

1988年兵庫県生まれ、大阪府在住。京都市立芸術大学大学院修了。自分のおかれた身のまわりの世界とやかに触れ合うのか、ささやかないたずらを行い、記録する作品を制作する。



「井戸の神様」、「井戸端町会議」

2つの作品プランを考えた。「井戸の神様」は、使われていない井戸をリサーチして祀りたい。「井戸端町会議」は、町の人々が交流できる場を作りたい。



きら・かなこ

1996年愛媛県生まれ、滋賀県在住。成安造形大学芸術学部在籍。日常生活の中での気づきや言葉遊びから、人と関わり合いながら、写真、映像、パフォーマンスなど多様な手法を用いる。

吉良 加奈子
「便利な世の中で昔の知恵を活かしながら、自然や神様と大切に暮らす京田辺の人たちの文化は、もっと若い世代の人たちも知ってほしいなと思います。」

「たくさんの作家と一軒家で共同生活をしながら、毎日意見を交換して興味が広がったり、思ってもなかった物に出会えたりと、毎日良いハプニングの連続でした。」

光岡 幸一



みつおか・こういち

1990年愛知県生まれ。東京都在住。東京藝術大学大学院修了。どうやら自分知らないものに出会えるかを考えながら、メディアにこだわらず、さまざまな視点で作品を発表。

「おせっかいリサーチ」

京田辺で問題になっている、休耕田や放置竹林についてリサーチ。自分が部外者であるという実感もあったが、素直に地域の農の魅力に触れることもできた。

「一度心の中を整理したいと感じた時、宿泊場所にはプライベートスペースがなく、しばらくトイレにこもることで、トイレの可能性を考えさせられた。」

西元里佳子



にしもと・りかこ

1996年京都府生まれ、京都市在住。奈良県立大学地域創造学部在学。少し違った着眼点で地域を見た作品制作やワークショップ、地域とアートのあり方のフィールドワークを行う。

「Kyotanabe×TOILET」

京田辺にはトイレがとても少ないという問題意識から、トイレという誰にも見せないようなスペースを使って京田辺で交流が生まれないかとプランを考えた。



京都:Re-Search 2017 in 京田辺

参加アーティスト

阿児 つばさ / 吉良 加奈子 / 西元 里佳子 / 前田 菜月 / 光岡 幸一 / 山本 昂二郎 / 横山 キミ (公募による7名)

開催日時 2017年8月21日(月)～9月3日(日)

場 所 滞在場所：KITAGAWA 邸
ワークショップ等会場：キララギャラリー、キララ館(京田辺市河原食田10-48)

プログラム

- 8月21日(月) 京都府庁にて、島袋道浩さん、藤浩志さんからのオリエンテーションを実施。
場所を京田辺に移し、ガイダンスとし、島袋さんの「アーティストにとってリサーチとは」の講演を開催。
- 8月22日(火) 島袋道浩さんと京田辺市内をフィールドワーク。
その後、各参加者によるプレゼンテーションを実施し、島袋さんからアドバイスをもらう。
- 8月23日(水)～8月26日(土) 各自の計画により京田辺市内を調査し、アートプロジェクトや作品プランの構想を策定。
- 8月27日(日) ワークショップとして、鷺田めるろさんから「地域とアートプロジェクト」を実施。
- 8月28日(月) 中間報告会を実施し島袋道浩さんからアドバイスをもらう。
その後、小田井真美さんとワークショップ「アーティスト・イン・レジデンスの活用と可能性」を実施。
- 8月29日(火)～9月1日(金) 各自の計画により京田辺市内を調査し、アートプロジェクトや作品プランの構想を策定。
- 9月2日(土) 参加者の作品プランやプロジェクトのプレゼンテーションによる講評会及び活動報告展を開催。
- 9月2日(土)～9月3日(日) 参加者の活動報告展を実施。一般開放し多くの鑑賞者が訪れた。

講師プロフィール



小田井 真美
AIRディレクター／文化芸術事業設計

1966年広島市生まれ。2001年から02年までとから国際現代アート展テメーテル事務局、03年よりNPO法人S-AIRに所属し、アーティスト・イン・レジデンス(=AIR)の運営、アートによる地域活性化事業、アーティスト・イン・スクールの企画、Sapporo2 Project(札幌の雪と除雪を考えるアートプロジェクト)のプロデュース。TransArtist(オランダ)で文化政策とAIRネットワーク・キングについて研究を行い、アーカスプロジェクト(茨城)ディレクター、コマンドNと共にアーティストの移動のためのポータルサイトMOVE ARTS JAPANに携わる。札幌国際芸術祭(SIAF)2014でチーフプロジェクトマネージャーを務め、現在は札幌市のAIR施設さっぽろ天神山アトスタジオAIRディレクター、文化芸術事業とその背景に係る調査研究・事業設計が生き甲斐。



島袋 道浩
美術家

1969年神戸市生まれ。那覇市在住。1990年代初頭より国内外の多くの場所を放し、そこに生きる人々や動物、風習や環境に関係したインスタレーションやパフォーマンス、ビデオ作品を制作している。パリのボンボン・センターやロンドンのヘイワード・ギャラリーなどでのグループ展やヴェネチア・ビエンナーレ(2003/2017)、サンパウロ・ビエンナーレ(2006)などの国際展に多数参加。2004年から2016年まではドイツ、ベルリンを拠点にし、ドイツ、ブラウンシュweig芸術大学やスイス、チューリッヒ芸術大学などで客員教授を務める。著書に「扉を開ける」(リトルモア)、絵本「キュウリの旅」(小学館)などがある。



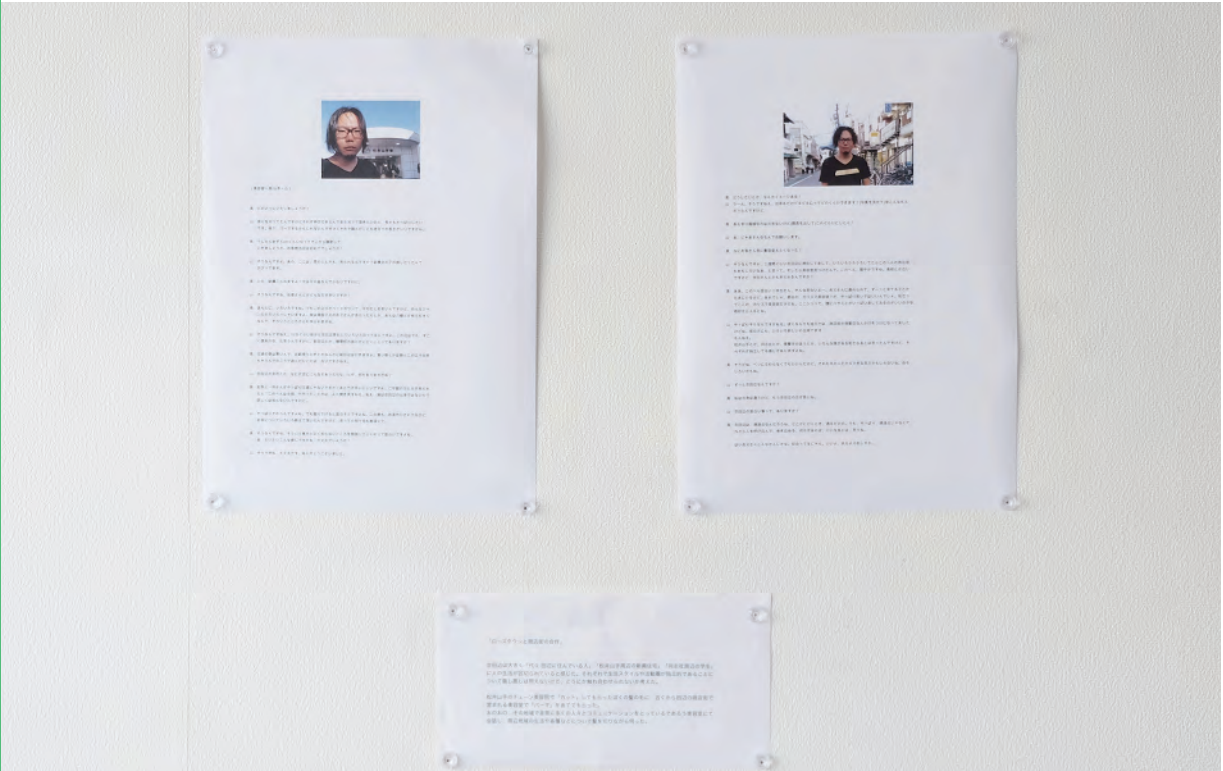
鷺田 めろろ
金沢21世紀美術館キュレーター

1973年京都府生まれ。担当した企画で特に地域に関わるものに、アトリエ・ワン、島袋道浩、坂野充学の個展、「金沢アートプラットフォーム2008」「3.11以後の建築」などがある。地域とアートプロジェクトに関する主な論考は「視点を生む、人をつなぐ」(『地域開発』521号、2008年)、「アートプロジェクトの政治学」(川口幸也編『展示の政治学』水声社、2009年)、「金沢アートプラットフォーム2008(金沢21世紀美術館)/CAAK」(熊倉純子監修『アートプロジェクト』水曜社、2014年)、「鶴来現代美術祭における地域と伝統」(『金沢21世紀美術館研究紀要アール』6号、2016年)。第57回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際美術展日本館キュレーター。

ホームページ <http://kyoto-research.com/kyotanabe>

「部外者であること、アーティストであること。だからこそ行えることと出来ないことがあることを知りました。」

山本 昂二郎



「交わる」

さまざまなジャンルの店に行き、店員と世間話で盛り上がり、そこから情報収集した。今回はプランの提案だけだったので、次回その企画を実行に移したい。



やまもと・こうじろう

1993年滋賀県生まれ、京都府在住。京都造形芸術大学大学院在籍。フィジカルなアクションによって、膨大な世界観や捉えにくい現実を可視化したいと考え、表現を行っている。

「京田辺のエリアがその昔から京都、奈良、浪速など人の行き交う土地だったせいか、人々は、見ず知らずの私が声をかけても快く相手をしてくれた。」

横山 キミ



よこやま・きみ

高知県生まれ、東京都在住。無意識のコミュニケーションをテーマに、映像、光、声や演奏、ダンスからなるパフォーマンスやインスタレーションを行う。

「まほろば再発見」

リサーチをした天王地域は市内でもアクセス不便な場所だったが、朱智神社や牡丹園「無二荘」を訪れ、話を聞いた。今後は神楽殿を再現したり、牡丹園のフォトブックを制作したい。



「大京都」とは、短期のアーティスト・イン・レジデンス事業である「京都:Re-Search」をもとに、滞在地域の文化性、歴史性を深める制作発表を伴う事業です。アーティストにより新たな視点で創り出されるアートドキュメント（＝記録）を、京都府内の各地域で展開し創作していきます。

大京都 2017 in 舞鶴

概 要

「京都:Re-Search 2016 in 舞鶴」の参加アーティストから2名を選抜し、新たに3組のアーティストとキュレーターを招聘しました。彼らは約1ヶ月間におよぶ滞在制作を行い、そのプロセスを舞鶴市内各所で公開し、作品を発表しました。

特 徴

アーティストとキュレーターの掛け合わせにより、地域の持つポテンシャル・魅力をアートの視点から引き出し、地域の新しいアートドキュメントを作成しました。

レジデンス期間

2017年9月11日（月）～10月6日（金）

発表期間

2017年10月7日（土）～11月5日（日）のうち金曜日・土曜日・日曜日・祝日

プログラム

10月7日（土）

オープニングトーク / 井上裕加里（聚幸庵 1 階大広間）、SHIMURAbros（旧山内家）各会場にて旧作上映（旧山内家） / SHIMURAbros

10月8日（日）

オープニングトーク / 臼田那智（西市民プラザ）、高川和也（大波上集会所）各会場にて旧作上映（旧山内家） / SHIMURAbros

10月9日（月・祝）

旧作上映（旧山内家） / SHIMURAbros

10月21日（土）

アーティスト × キュレータートーク / 石神夏希 × 吉田雄一郎
西市民プラザ 2 階市民活動団体活動室（FM まいづる横）

10月23日（月）～11/3（金・祝）

上演 1（特設ウェブサイト www.aoniau.jp） / 石神夏希

11月4日（土）

アーティスト × キュレータートーク / SHIMURAbros × 西田雅希 & 服部浩之（旧山内家）
新作上映（旧山内家） / SHIMURAbros
上演 2（カトリック西舞鶴教会、舞鶴市立東図書館、五老ヶ岳公園） / 石神夏希

11月5日（日）

新作上映（旧山内家） / SHIMURAbros
上演 2（北吸トンネル、アートスペース 973 及び大森神社、五老ヶ岳公園） / 石神夏希

制作者

【京都:Re-Search 2016 in 舞鶴 参加アーティスト】2 名
井上 裕加里 × 原 久子
臼田 那智 × 原 久子
【アーティスト × キュレーター】3 組
SHIMURAbros × 西田 雅希 & 服部 浩之
高川 和也 × 堀内 奈穂子
石神 夏希 × 吉田 雄一郎

会 場

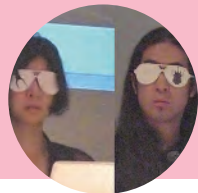
旧山内家（舞鶴市行永 1792）
大波上集会所（舞鶴市大波上 189-2）
聚幸庵 1 階大広間（舞鶴市宇浜 18 ホテルアマービレ舞鶴北側）
西市民プラザ（舞鶴市円満寺 158-6） 等

ホームページ

<http://kyoto-research.com/maizuru2017>

「京都:Re-Search 2016 in 舞鶴」のリサーチをもとに、地域の新しいアートドキュメント（＝記録）作品を制作・発表する「大京都 2017 in 舞鶴」を開催しました。昨年度の参加アーティストから2名を選抜し、新たに3組のキュレーターとアーティストを招聘し、約1ヶ月間におよぶ滞在制作と、そのプロセスを舞鶴市内各所で公開し、発表しました。





アーティスト
SHIMURAbros シムラブロス

ユカ（1976年生、多摩美術大学卒、英国セントラル・セント・マーチンズ大学院修了）とケンタロウ（1979年生、東京工芸大学映像学科卒）による横浜出身の姉弟アーティストユニット。平成21年度（第13回）文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞受賞。欧州の主要国際映画祭での上映をはじめ、国内外の美術館で作品を展示している。2017年にはArt Review誌（Asia）フューチャークレイトに選出。2014年にポーラ美術振興財団の助成を受けベルリンへ拠点を移し、現在はオラファー・エリアソンのスタジオに研究員として在籍中。

SHIMURAbros ×

西田雅希 & 服部浩之《光る海》

虚構と現実、光と水 — 「海」を交点に展開する物語



会場として選んだ幕末・明治期の古民家・旧山内家でインスタレーションを展開。あわせて屋敷裏手の蔵で、シンガポールの光の歴史に焦点をあてた過去作『Chasing the Light』を上映し、海を渡ってひとつの光からまた別の光へと続く流れを示唆した。



「光る海」とはどういう海だろうか。映画の中の表現としての海と、いま目の前にある舞鶴の海。これら両方を繋げ、「光る海」にまつわる独自の物語を紡ぐことは可能だろうか。舞鶴の海の映像と鏡と水と光の「海」を主軸に、リサーチの道中で出会ったもの、舞鶴に伝わる民話、市民から集めた光るものなども用い、現実の海と虚構の海が循環的な影響を生む空間をつくることを目指した。



作品タイトルの『光る海』は、廃校になった丸山小学校を訪れた際に作家が目にした、往時の丸山小の児童による標語からの引用である。この語はSHIMURAbrosに、映画の撮影で使う波の表現手法を想起させた。それは割れた鏡を水中に入れ、そこにライトを当てることで反射光を生み波を表現するというもの。



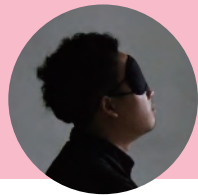
キュレーター
西田雅希 NISHIDA Maki

慶應義塾大学文学部卒業、ロンドン大学UCL美術史修士課程修了。2007年に渡英後、美術大学・美術館から商業画廊まで、公民の様々な角度から教育、アーティストマネジメントと展覧会企画に携わる。あいちトリエンナーレ2016を経て日本に拠点を移し、フリーランスでキュレーションと執筆を行っている。近年の活動にTabakalerariaリサーチ・レジデント、キュレーター（スペイン、2016）、Devil Art Foundation + The Japan Foundation New Delhi 共催展覧会「Online Do」キュレーター（インド、2017）など。



キュレーター
服部浩之 HATTORI Hiroyuki

1978年愛知県生まれ。2006年早稲田大学大学院修了（建築学）。2009年・2016年青森公立大学国際芸術センター（AACAC）学芸員、アジア圏を中心に、展覧会やプロジェクト、リサーチ活動を展開している。近年の企画に「和田典久入瀬芸術祭」（和田市現代美術館、典久瀬地域、2013年）や「Media / Art Kitchen」（ジャカルタ、クアラルンプール、マニラ、バンコク、青森、2014年・2014年）、「あいちトリエンナーレ2016」、「アッセンブリ・ナゴヤ2016」、「ESCAPE from the SEA」（ロシア国立美術館、Art Printing Works、2017）などがある。



アーティスト
高川和也 TAKAGAWA Kazuya

1986年熊本県生まれ。2017年LUCÉ合同会社入社。近年は同社にて広告の企画／制作、映像やテキストを扱ったプロジェクトの発表を行う。主な展覧会に「ソーシャリー・エンゲイジド・アート展」社会を動かすアートの新潮流（3331 Arts Chiyoda, 東京、2017）、「ASK THE SELF」(Tokyo wonder site 本郷、東京、2015)「screen」(HIGURE17.15 cas, 東京、2014)、「Kazuya Takagawa's soloshow」(3331 Arts Chiyoda, 東京、2012)、など。

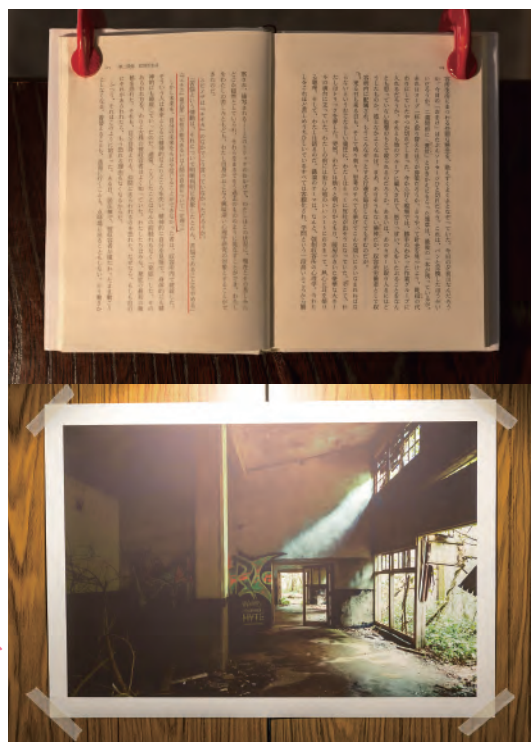
高川和也 × 堀内奈穂子

《Negapedia (仮)》

国内屈指の火薬工場があった 舞鶴に残された言葉を拾う



発表では、森田氏、小坂氏のインタビュ映像とともに、関本氏の手記から抜粋したテキスト、旧日本海軍第三火薬廠の地図や資料、また、《ASK THE SELF》も並列し、その制作過程を展示した。非公開の対談も行われ、アートの表現を通してこれまでは異なる文脈で伝達されていくことへの期待も見られ、有意義な議論となった。



「舞鶴滞在中、舞鶴空襲に関する証言を本にまとめている関本長三郎氏、元工廠動員学徒であった森田重信氏、小坂光孝氏にインタビューを行った。かつて軍港として栄え、国内屈指の火薬工場を有したこの街で、「人間が絶望に耐えるために発した言葉」の収集と編纂を試みた。



アジア・太平洋戦争時代に国内屈指の火薬工場を有した同地の文脈に着目し、旧日本海軍第三火薬廠の歴史や、かつての学徒であった人々の手記を紐解きながらリサーチを展開した。今後、高川は、舞鶴に限らず、様々な場所、時間、人にインタビューを行い、人間が極限的な状態にあるとき、どのような言葉を紡ぎ、表現するのかを検証する。



MO 法人アーツ・インシアティヴ・ウキョウ
「ミエイト」キュレーター
堀内奈穂子 HORUCHI Naoko

エジンバラ・カレッジ・オブ・アート現代美術論修士課程修了。2008年より、NPO 法人アーツ・インシアティヴ・ウキョウ「A・I・T / エイト」に携わる。A・I・Tでは、展覧会やイベント、トーク、企業プログラムの企画の他、教育プログラムM (Making Art Different) のレクチャーを務める。ドクメンタ12マガジンス・プロジェクト「メトロノーム11号」何をなすべきか？ 東京（2007）アシスタント・キュレーター、「Home Again」(原美術館、2012) アソシエイト・キュレーター、国際交流基金主催による展覧会「Shuffling Energy」(Gallery Seescape, タイ、2015) キュレーター、「Invisible Energy」(STPAULST Gallery, ニュージーランド、2015) の共同キュレーターとして携わる。「アークスプロジェクト」(2013)、パラダイスエニア2015、2016ゲストキュレーターを務める。



劇作家
石神夏希
ISHIGAMI Natsuki

1999年より劇団・ペビン結構設計を中心に劇作家として活動。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。近年は横浜を拠点に国内各地の地域や海外に滞在し、都市や「ミニシティ」を素材にサイトスペシフィックな演劇やアートプロジェクトを手がける。また住宅やまちに関するリサーチ・企画、NPO法人『場所と物語』理事長、遊休不動産を活用したクリエイティブ拠点『The CAVE』の立ち上げおよびプログラムディレクションなど、空間や都市に関するさまざまなプロジェクトに携わる。



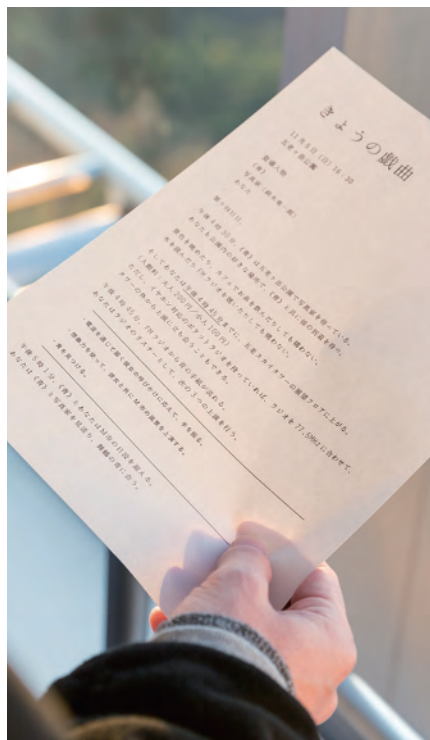
石神夏希 × 吉田雄一郎

『青に会う 2017.10-11』

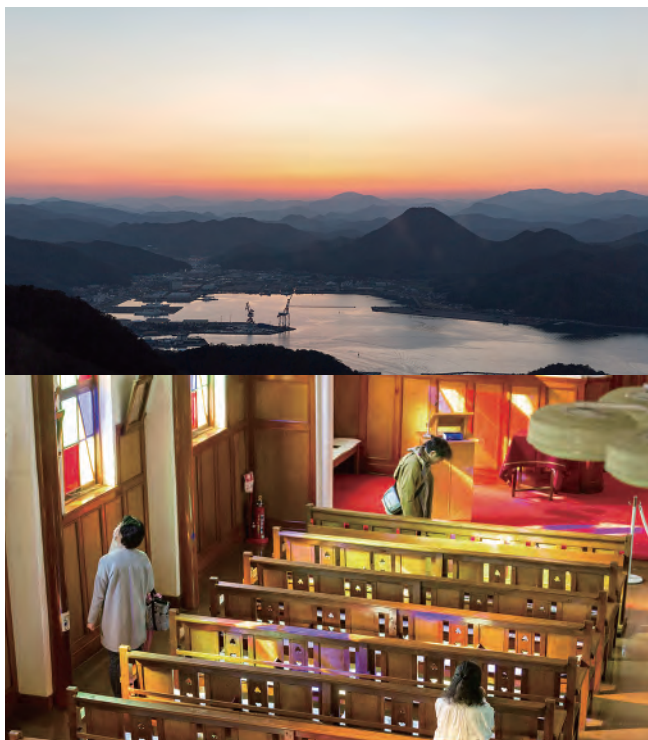
舞鶴の日常を上演する—語り得ない「まち」とアートはどう向き合うのか



本作はフィクションと現実の間で立ち上がる想像力を通じて、鑑賞者のまちに対する新たな視座を引き出そうとする。また何気ない日常の断片や個人的なエピソード、他愛ない出来事集の集積からなるまちの有り様を提示することで、「語り得ないものについてどのように語るのか」という問いを投げかける。そして個と個の関係性の中にこそ、まちという捉えきれない総体と私たちが関わっていくためのヒントがあることを示している。



《青》という登場人物が舞鶴をモデルとしたM市に2週間滞在し生活する物語を戯曲化。実際のまちを舞台に2週間ノンストップで上演し、地域の方々にも本人役で出演いただいた。鑑賞者は現地で上演を目撃する他、日々インターネットおよびFMまいづるや舞鶴市民新聞といったローカルメディアで公開される上演記録に触れる。最終週末には鑑賞者自身が「きょうの戯曲」(上演台本)を手渡され、登場人物として上演に参加した。



地域外から来たアーティストやキュレーターが、わずか数週間の滞在で得られる限定された視点で、舞鶴を編集し語り得るのか。アーティストはもちろん様々な立場の鑑賞者たちが、まちや人々などのような関係性を結ぶことができるのか。本プロジェクトはこうした問いから出発し、「アーティスト・イン・レジデンス自体を演劇化する」という企てとして実施された。



城崎国際アートセンター
プログラム・ディレクター
吉田雄一郎
YOSHIDA Yuchiro

1979年兵庫県生まれ、兵庫県豊岡市在住。トーキョーワンダーサイト、フェスティバル/トーキョーなどにて、コーディネートとして勤務したのち、2015年から兵庫県豊岡市の舞台芸術専門のアーティスト・イン・レジデンス施設・城崎国際アートセンターのプログラム・ディレクターとして、レジデント・アーティストの選定や主催公演などの年間プログラムの企画立案に携わっている。北近畿・山陰地域の緩やかなアートネットワークを構想中。演劇カンパニー・マレビトの会のプロジェクト・メンバー。

《記憶と忘却と口承》井上 裕加里 × 原 久子 × 白田 那智《舞鶴の赤い家》



現代美術作家
井上 裕加里 INOUE Yukari

広島県生まれ。倉敷市立短期大学服飾美術学科、成安造形大学美術学部美術学科現代アートコース卒業。現在は、京都を拠点に活動を行う。主な活動に、「フレットシュテルケ・インターナショナル2017」東アジア文化都市、「Gallery PARCArt Competition」個展「堆積する空想」など。「雪んは目の前にあり、見えていないのは問いである」私は、現代社会の身近な問題を主題に作品を制作する事で、社会に潜在するその問いを探そうと試みている。



美術家
白田 那智 USUDA Nachi

1991年生まれ。東京都出身。現在茨城県ひたちなか市珂湊地区を拠点に活動を行う。2014年武蔵野美術大学日本画学科卒業。主な経歴に2016年「MMみなとメディアミューシウム2016」地域賞、SSS賞、アーティスト・イン・レジデンス「京都・Re・Search・in 舞鶴」など。主たる場所での人やものとの出会いを強く意識した制作を行う。また、刺激の強い色や、廃材など雑多なモチーフの重なり合いを造形により作り出したり、或いは作品テーマと関連のある素材やモチーフを使い、変化し続ける「生きる」この身体を、作品の中にどこにあるような制作をしている。



アートプロデューサー
原 久子 HARA Hisako

京都市生まれ。90年代初頭よりアーティスト・イン・レジデンス、アートスペースの調査研究、アートプロジェクトや展覧会の企画・運営、執筆、編集、コンサルティングなどに携わる。主な展覧会共同企画に「六本木クロッシング2004」（森美術館、2004）、「Between Site and Space」（TWS渋谷、2008）、「ARTSPACES Sydney 2009」（あいちトリエンナーレ2010）（愛知県美術館他、2010）他。共編著に『変貌する美術館（昭和堂）』など。専門は現代美術、文化政策他。大阪電気通信大学教授。



「京都・Re・Search 2016 in 舞鶴」から選抜された白田那智は、西舞鶴マイン商店街にある真名井の水汲み場の隣に、小さな赤い家《舞鶴の赤い家》を建てた。水を汲みにやって来る人たちが行き交う道に面して、むき出しの状態で作成を行っていたため、白田に「何が出来るとですか?」と話し掛ける人たちが多かった。そこで白田は、「家の使い道をどうしましょうか?」と逆に質問を投げ掛けることで、町の人たちから返ってきた答えを実際に試してみた。そんなコミュニケーションで出来上がった赤い家は、展示期間内だけでも、舞鶴の町と人に何か変化を起こしたに違いない。

制作協力依頼：田中雅理（木工作家）
協力：舞鶴市西市民プラザ

井上裕加里は、昨年度参加した「京都・Re・Search 2016 in 舞鶴」でのリサーチを元に、今回さらに引き続いてリサーチおよび作品制作を行った。シベリア抑留者、満州からの引揚者などの戦争体験を語る人たちが少なくなっている中で、井上はこうした人たちにインタビューを行った。昨年度井上が気付いた「彼らの体験や記憶、個人史をどのように残しておくべきかを早急に考えなければならぬ」という意識の元、彼らの記憶を引き出したり、記録をしようとした。そして、映像作品や言葉を文字に起こしたテキストとしても発表したことで、最適なアーカイブ方法についても考察した。

協力：NPO法人舞鶴・引揚語りの会
協賛：ホテルアマービル舞鶴

地域“に” 向き合う、地域“と”向き合う

～アーティスト・イン・レジデンスから、未来に向けた対話～

2017年12月10日（日）13:00～17:30 京都文化博物館 別館

「Re-Search」をキーワードとした、アーティスト・イン・レジデンス事業「京都・Re-Search」「大京都」を府内各地で取り組んでいく。これは、府内各地に眠る「タカラ」を掘り起こし、アートの「チカラ」を介して、新たな価値観の発見や発信へと繋ぐ、地域の文化資源を生かしたプログラム。アーティストの目や力を通して、地域を観察し、地域主体で文化芸術活動に関わる環境づくりを促進し、地域のポテンシャルや魅力をアートの視点から引き出していく。

本フォーラムでは、東日本大震災後、福島県立博物館が中心となって行っているアートプロジェクト「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」との共同開催により、それぞれの活動を通してアートが社会（地域）に与える可能性について議論が深められた。

第一部

はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトトーク

「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」取組報告

報告者／小林めぐみ（福島県立博物館主任学芸員）

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故の後、2012年に「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」がスタート。福島県立博物館だけでなく、県内で活動するNPO、大学、他の文化施設と実行委員会を組み実施する事業である。福島県立博物館は比較的被害が少なかった会津地域にあるため、被災地が文化的な視点の事業を行う状況ではなかった中で、次第に重要となるだろう文化による支援事業の中核を担うべきではないかとの意識を持ち開始した。また、博物館という施設の性格から、故郷を離れた方たちの土地の記憶の記録、震災と事故の作品による記録も重要視してきた。福島で2011年やその後起こったことを記録し、伝えていきたいという思いから、美術作家との協働を行っている。また、3年前からは、事業において制作された作品をもって県内外に福島県を伝える成果展を行っている。

対談「福島に向き合う・福島を伝える」

登壇者／岡部昌生（美術家、

港千尋（写真家／著述家／NPO法人Institute

代表理事）

モデレーター／八巻真哉（京都府文化スポーツ部文化交流事業課）

岡部昌生氏と港千尋氏の15年前の出会いから、話はスタート。2009年福島県立博物館での展覧会に関わった2人は、その後いろいろな形で福島と関わって行く。3・11以降の2011年夏、京都精華大学で行った岡部氏の公開制作では、3・11の被災地の土を使うことで、被災地ではない京都と被災地域がどう向き合ったかを考察した。その翌年から、岡部氏が参加した「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」では、津波で押し流された防波ブロックや除染活動に伴う御神木の伐採といった被害と復興の現状をフロッタージュ作品によって記録する活動を長期的に実施。また、作品を核としたトークイベントなどで、被災地の人たちに向き合ってきた。同プロジェクトの制作地の一つとなり、港氏も同行した福島県石川町では、戦中に行われていたジルコニウムの精錬工場跡地を制作対象とし、福

島のエネルギー史にまでテーマが深まったことを、感想や写真と共に紹介した。こうして福島と向き合ってきた2人は、地元の人が震災の教訓として新しく石碑を作ったことを元に、伝えること、記録することの大切さも語った。

第二部

京都・Re-Searchフォーラム

「京都・Re-Search2017 in 福知山&京田辺」、

「大京都2017 in 舞鶴」取組報告

報告者／八巻真哉（京都府文化スポーツ部文化交流事業課）

パネルディスカッション「地域とA・Rとアートプロジェクト」

登壇者／中崎透（美術家）、日比野克彦（アーティスト）

モデレーター／藤浩志（美術家／秋田公立美術大学教授）

中崎透氏から、3・11以降、音楽家の大友良英らが行っている「プロジェクトFUKUSHIMA!」での「福島大風呂敷」のプロジェクトについての説明。福島県内で、一万人規模の野外フェスティバル「フェスティバルFUKUSHIMA!」を企画した2011年当時、まだ放射線量の安全性について分からない状況が続いていた。そのため地面に布を張ることになり、そのシートを作ることに。中崎氏は、建築家のアサノコウタ氏とともに全国の人たちから布を集め、地元の人たちと一緒に縫い、それをフェスティバル会場に広げた。このプロジェクトを「福島大風呂敷」と呼び、今なお毎年、全国各地で形や場所を変えながら「フェスティバルFUKUSHIMA!」が行われるたびに、中崎氏が作った布は広げられているとい

う。また、2010年に中崎氏がメンバーの1人であるNadegatainstantpartyが、青森県の国際芸術センター青森で発表した《24OUR TELEVISION》は、センターのボランティア有志の協力のもと、地元のテレビ局関係者、演劇やダンス関係者などと手を組んで、「一日限りのテレビ番組を作る」という大掛かりな作品を完成させることができたという。日比野克彦氏は、アーティスト・イン・レジデンスだけでなく、アーティスト・イン・ホスピタルやアーティスト・イン・インダストリーといったいろいろな場所にアーティストが入って行く必要性を強調した。日比野氏が2003年から参加する、新潟県の「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」では、閉校になった小学校に入って行った。地元の人たちと一緒にしてくれるものを模索した結果、アサガオを育て始めた。毎年できるその種はその新潟だけでなく、日比野氏が展覧会を行う別の地域で蒔くたびに、新潟の人たちが駆けつけたり、アサガオの種を元にして新たな繋がりが生まれているという。こうした2人の経験談によるまとめとして、自身もアーティストである藤浩志氏から、アーティスト・イン・レジデンスやアートプロジェクトの有無により地域の文化格差が生まれていること、アーティスト・イン・レジデンスやアートプロジェクトを行う地域にアートコーディネーターが育ち始めていること、小学校や中学校といった学校教育にもアーティスト・イン・レジデンスやアーティストとの協働を組み込むべきであることなどが提言された。



分科会

「アーティストによる『滞在』と『制作』」

ファシリテーター／大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術プロジェクト室／文化生態観察）、小田井真美（さっぽろ天神山アーティストスタジオ A I R デイレクター）
総評／菅野幸子（A I R Lab アーツ・プランナー／リサーチャー）

小田井真美氏がアーティスト・イン・レジデンスとは何かを解説した。アーティスト・イン・レジデンスとは、アーティストが主体的に選んで、自身のプロジェクトや作品のために行くものであり、普段の拠点から離れ、一定期間他の場所に滞在することである。こうしたアーティストを受け入れるオーガナイザーからすれば、アーティストの社会的存在と意識を認め、人、資金、場のどれか、もしくは全部や一部を提供するサポートである。支援の成果としての作品や展覧会（アウトプット）をプログラム中に求めることは必須ではなく、プログラムごとに任意で設計を行うことができる。アーティストと同じくオーガナイザーも個人・単体、集団など多様である。現在「Trans Artists」という世界で一番大きなデータベースウェブサイトでは、アーティスト・イン・レジデンスとは①同一のアーティストに複数回の滞在チャンスが与えられていること②有料宿泊施設ではないこと③招待制や連携プログラム等の限られたアーティストの為ではないこと④自国のアーティストに限定せず、広く国際的なアーティストを受け入れていること、がアーティスト・イン・レジデンスの条件として挙げられている。日本においては、1990年代に導入され、2000年以降、特に3・1以降のアーティスト・イン・レジデンスの定義は拡張している。例えばアートプロジェクトとアーティスト・イン・レジデンスの中間のようなものや、アーティストが経費を負担して移動・滞在することまでアーティスト・イン・レジデンスと呼んでいる。いずれの場合も、よそ者であるアーティストが滞在地域の住民に刺激を与え、アーティストのネットワークが構築されること、つまりアーティスト・イン・レジデンスとは、創造

的環境のインビジブルな基盤整備に有効である。こうした状況下において、アーティストとオーガナイザーの双方が「やって良かった」と思えることが、アーティスト・イン・レジデンスの成功であると言える。

続いて大澤寅雄氏から、シンポジウム聴講者向けに行うワークショップの説明があった。参加者は4〜5人のグループに分かれ、席に着く。アーティスト・イン・レジデンスとは何かを説明する文章を、単語ごとに分解し、「助詞を抜いて」作る。例えば「アーティストが作品を作る」という文章の場合、与えられた付箋に「アーティスト」「作品」「作る」といった単語を、名詞、動詞、形容詞・副詞で色が異なる付箋に書く。個人あるいはグループで作成したら、その付箋をシャッフルして元の文章とは全く異なる文章として並び替える。適当に組み合わせられた文章がいくつかできたら、別のテーブルへ移り、テーブルの上にある文章について周りの人たちと話をする。さらに助詞や別の言葉を加えながら、新たな文章にする。そして最初のテーブルに戻る。

こうした流れで作られた文章は、
・常識だけで対話する主婦が資源活用を生かす
・交わるがハプニングを育てる
・苦しみの井戸端会議に出掛ける
・景色が来る

などが挙げられた。最後に大澤氏から、このシンポジウムのタイトル同様に、助詞にこだわってアーティスト・イン・レジデンスについての文章を作るというワークショップだったことが告げられた。前半の小田井氏の説明にあったように、アーティスト・イン・レジデンスの定義は拡張しており、説明しにくい活動でもある。そのため、このワークショップで協働で作った文章のように、自由に発想しながら、立場の違いを越えて、目的や成果に対する認識の共通点や相違点を対話することが重要である。という話があった。

京都:Re-Search 2017 報告書

2018年2月発行

京都:Re-Search 2017 in 福知山／2017年8月21日（月）～9月3日（日）

京都:Re-Search 2017 in 京田辺／2017年8月21日（月）～9月3日（日）

大京都 2017 in 舞鶴／レジデンス期間 2017年9月11日（月）～10月6日（金）
制作発表期間 2017年10月7日（土）～11月5日（日）（※金・土・日・祝開場）

京都:Re-Search × 福島:はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト フォーラム／2017年12月10日（日）
「地域“に”向き合う、地域“と”向き合う～アーティスト・イン・レジデンスから、未来に向けた対話～」

主催／京都:Re-Search 実行委員会（京都府、福知山市、舞鶴市、京田辺市）

発行
京都:Re-Search 実行委員会（京都府、福知山市、舞鶴市、京田辺市）
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府文化スポーツ部文化交流事業課内
TEL:075-414-4279 FAX:075-414-4223
Eメール:bunkakoryu@pref.kyoto.lg.jp

<http://kyoto-research.com/>

Copyright© 京都府